

11-5 ウエペケレ「ユペツホントムンクル」解説

語り手：平賀さだも
聞き手・解説：萱野茂

萱野：えーっとこれは uepeker [散文説話] ですね。Yupet hontomo un kur a=ne hine an=an pe ne ruwe ne [私は湧別川中流で暮らしている者です。] ちゅうとっから [というところから] 始まるわけだ。

平賀：そうだ、そうだ。

萱野：わたくしは湧別川の、川のちょうど中ごろに住んでおる1人の aynu [男] でした。猟も非常に上手で、いつでも山へ行っては沢山の

平賀：Yupet hontomo ちゅうたら今コタンちゅうとこだべと思うよ。コタンちゅうとこあんだ、湧別ダンチャン(?)の手前にある。

萱野：あーなるほどね。今の、まあ鹿もたくさん獲れるし熊もたくさん獲れるし何不自由なく生活をしておった。

ある日のこと山へ熊狩りに行った。まあ kuca cise [狩り小屋] と言って猟小屋があるのでその猟小屋へ行って、いつも山行ったらアイヌの風習として inaw [イナウ] を作ってそこで inaw roski [イナウを立てる] と言って、それぞれ山の神様に inaw をあげて「熊を獲りに来ました。どうぞ宜しく。」というそのお願いやら、あの inaw を作るわけなんだが、またいつもと同じように inaw を作って外の祭壇へ立てて、そして家の中に入って黙ってこう見ておると、その inaw がいつのまにかその家の方に向かってバサッと倒れてる。

「どうしてだろうな？」と、「何かその悪いことのおきる前兆ではないだろうか？」と、そんなこと考えながらまだ(また)外へ出てそれをきちっと立て直して家の中へ入って、ちょっとうっかりしてるとまだそれが倒れておる。

それとそのまあそういうこと(? 録音不良) あったんでなんかこううす気味悪いというような気持ちもして、おる、おりながらまあ、その日は

夜になってまあ次の朝、朝早く起きたんだけど、いわゆるそういうマタギと言うかその狩人のそのクセとして、その人もそうなんだが、行って泊まる場所を決めても、ちょっとその辺というわけで弓矢を持って朝めし前でも山行って、すぐでも山へ行く。

その日に限って朝起きても全然、行く気もない。そんなことを、でもただその炉端にゴロンと寝たっきりでその日は一日を過ごしちまったと。まったくそのアイヌ語での表現 *i=ka tuye... i=ka toy kus a kus a pekor yaynu=an* [(私が) かつたるい : *i=ka toy kus pekor* (私の上を土でおおわれたような)・萱野辞典 p 46 と同意か] というふうな表現していますが、それはその、寝ている上に土を被され、被せられたような気持になってまったくそのまあ金縛りまではいってないんだけど、その動けないという状態なんです。

そんなことで夜になった。朝めしも食べたったのか食べなかったのか分からないぐらいにまあ夜になって、それでも相変わらずその体が重くてまったく動けないという感じ。炉端にゴロンと寝たっきり、そうして夜になったらまあ、いいかげん真っ暗くなってから山の方からものすごい風を巻き起こすように、何者かがすごい勢いで走って来た。足音聞いたらそれは大きな熊であるらしい。

その熊が、まあまっ直線に走って来て私の泊まっておる狩り小屋の入口へこう、ひょいと顔を出した途端に何を見たかその熊はもう、ものすごい声をだして「フン！」とか「ホッ！」とかというような恐ろしい声を出しながら、まあバックして走って行ってしまった。それから暫くは音沙汰もない。

そしたらまだそれが、その熊今度はこっそり戻って来て足音忍ばせて窓から覗いた。そしたら、さっき戸から覗いた時と同じように、まだ何を見て驚いたのか、ものすごいびっくりした声を出して戻って行っちゃった。それがもう、そしたらまだ暫く音がない。それからまだ、何……暫くの間おいて戸の方からまだ、コソコソジワジワ来て覗いてはすごい驚きをして戻ってしまう。という繰り返しが夜いっぱい続いた。それでも、どういうふうなったのかもわたくし自身は全然、動きがとれないと。

そんなようなことでまあ夜が明けた。夜が明けて、まあ私はその、夜が明けたら急にその体が前と同じように、こうすっかり元の状態になった。まあ夜いっぱい眠らなかったせいもあるけれども、まあ朝起きたんだから今度はすっかり体が元のじょうだい……状態になったので、それにまあ火を焚いて鍋を掛けて、まあ何を焚いたか鍋を掛けて、で、ゴロッとまあ炉端へ横になったらそのまま、まあウトウトと眠りに入ったら夢枕に

綺麗な女の人が立って言うのには「実はわたくしは、あなたのこの *kuca cise* [狩り小屋] という狩り小屋のすぐ側でいる蛇だ」と。蛇の神様なんだと。しかもその *kuca cise* のすぐ側でちょっとしたアイヌ語でさっき *uepeker* [散文説話] で *otanikor* [砂原] と言ったがその、土の出ている綺麗な場所があつて、そこへまあアイヌであるわたくしがその *inaw* を作った時には必ずその *inaw* の作り屑とか *inaw* の残りなんかを何気なくそこへポンと置く癖というか、そんなゴミ投げとは違うけれども何となく綺麗なその砂原なのでそこへ置くようにして、いつもしておった、ものだったが、その夢枕に立った女の言うのには、

「わたくしはその小さな砂原に……、を住まいとしておる蛇だったと。それがあんたはいつも私に *inaw* をくれるので普通ではもらえないはずの *inaw* がそういうふうにもらえるので、いつも感謝しておったと。ところが今、猟に来るの黙って見ておったら、あんたがその、まあこの狩り小屋へ来るのを分かっておったその獰猛な熊が襲いかかって喰い殺してやると。それも神の国でも悪さをして神様全部が集まって罰して、そのアイヌの住んでおる村では住めなく、よその村へ追放される途中、その行きがかりに喰ってやるという考えてくる熊がおったので、それを助けてやらんきゃならんと。

あんたを助けてやろうと思って、まあ昨日の朝からいろんなその *inaw* がひっくり返るのを何か、でこう悪いことがあるぞと知らせておったり、それから、夕べ、昨日の朝から全……ずっとその私の衣をあなたに貸したんだと。貸したというより寝ている上へこう着せておいたと。それはまあ、あんた自身は分からないでしょうけれども蛇の姿に変えておいたんだと。熊はそれを見て一番嫌うので、その窓は……戸から見て、それを見ても、のけ反るように驚いて逃げた。『確かに人間がいて喰いに来たのにそれがそんなんなってる。変だ』と思って、まだ窓から来てみる。やっぱり同じ。戸へ……戸からもう1度廻っても同じという繰り返しを朝までして、とうとうまあ、お前を喰い殺すことも出来ないでまあ夜が明けて帰っちゃったんだと。それでまあ、あなたを救ったのは実はわたくし蛇の女神であつたと。けれどもいつも *inaw* をくれたので、それをまあ、せめてこういうことがお礼としてあんたを助けたのですからこのあとも *inaw* の余りでもいいからまあ *inaw* をください」と。

そういうふうに夢枕にその蛇の女神が人間の姿になって立ってくれた。それを聞いて、ぱっと目が覚めて、まだ掛けて眠ったところの鍋はまあ煮立っておるぐらいに短い時間ではあつたけれども、そういう夢を見たのですぐに *inaw* を作って、あらためてその *otanikor* というまあ小さな砂

原ですね。まあこの uepeker〔散文説話〕を聞いた感じとしては、そうね、十坪かそこらぐらいの砂原という感じに聞こえますが、その砂原のところへ inaw を立てて「本当に有難う御座いました」とお礼をしました。

それからなおさら私は運がいいように沢山の熊が獲れ鹿が獲れ何不自由なくわたくしは生活をしておりました。こんなことでまあ aynu になって一人前になってから恐ろしいば恐ろしい、そういう経験を私は持つておる aynu でしたと、1人の aynu が言いました。

これは uepeker〔散文説話〕です。